

近年の英語史をめぐる教育とその研究の一端について

網 代 敦

1. はじめに

英語史という学問分野が扱う範疇は幅広い。時代的な期間を考えると、大陸のゲルマン民族が話していたゲルマン語の方言が彼らによってブリテン島に持ち込まれた年である 449 年をもって古英語の始まりとするならば、1500 年以上の長さに亘る。イギリスを通し世界に広がり国際語となり、さらには “Englishes” という多様な言語的様相を呈してきている現代までを扱う壮大な物語であると言える。また英語史は言語面と同時に文学・文化を初めとした緒領域に跨る学際的視点への言及を必要とする分野¹でもある。このような広がりを見せる中、日本における昨今の大学のカリキュラムにおいては、その存在が必ずしも優遇されているとは言えない。かつては英文科には必ず設定されていた科目であり、英語の教職課程の必修科目でもあったのだが、近年はそのようなカリキュラム上の枠組みから外されつつある。各大学で英文科自体が統合や廃止されていくことに拠るところが大であるという事情もある。ちなみに、英語史という歴史言語学分野と関わる中

¹ Mary Hayes and Allison Burkette, “Introduction” in *Approaches to Teaching the History of the English Language: Pedagogy in Practice*. Ed. by Hayes & Burkette. Oxford University Press, 2017: 1-10 (p.3) は、英語史が触れる領域を次のように指摘している。“Over the course of a single semester, a HEL course may incorporate material from history, geography, lexicography, philology, literature, grammar, and linguistics, the last of which includes the subfields of phonology, morphology, syntax, semantics, pragmatics, and sociolinguistics.” (HEL は the History of the English Language の略)

世英語英文学の世界もカリキュラム上では肩身の狭い状況に追いやられ、フィロロジーの研究の面白さを学生に伝える機会が失われつつあるような気がしてならない。特にこの分野の研究者が英語史の授業を担当するということもあり、このような現状の危機感からここ数年「英語史教育」という立場からの発言が学会や研究書、論文などで見られるようになってきている。本稿ではその状況のごく一端を紹介したいと思う。

2. 日本の学会・研究会における英語史教育を扱ったシンポジウム

2-1. 英語史研究会 (2005. 9/24)

早くに英語史教育の問題を取り上げたのは、英語史研究会が2005年9月24日九州大学で行った第14回大会におけるシンポジウム²であった。「日本における英語史教育 ― 問題と課題」と題し、以下の5名による講師がそれぞれの立場から問題の所在とそれを克服するための課題の提案を行った。

谷 明信 (兵庫教育大学) 「海外の英語史教育の概観 ― 日本での英語史教育へのヒント」

中尾佳行 (広島大学・現在福山大学) 「教育学部学生のための英語史 ― 言語の「発達」から学習の「発達」へ」

守屋靖代 (国際基督教大学) 「教養学部での英語史 ― 国際基督教大学の場合」

家入葉子 (京都大学) 「英語史教育と英語史研究 ― 英語史を取り巻く環境の変化と今後の方向性」

石川慎一郎 (神戸大学) 「現代英語および英文学研究における英語史的視点の必要性」

² このシンポジウムの内容は、英語史研究会のホームページに掲載されているものを参照した。(http://www.jashel.sakura.ne.jp/resume14.htm)

谷氏は、1990年代前半から問題として取り上げられてきている海外の英語史教育の取り組みを概観し、受講者を考慮し重点の置くべきところ、教材の選択、現代英語との関わりなどを論じた。中尾氏は、英語を対象とする第二言語学習者が「知的好奇心を高め、応用力や論理的な思考を育成し、ひいては彼らの言語認識の発達を促す」³ 一方法として、英語の多義性が歴史的にどのように生じてきたかを探ることにより、その応用が図れるのではないかという実践的学習方法の提案を試みている。守屋氏は、学科、学年、母語、履修形態（必修か選択か、教職科目用か否か）など多様な学生が履修するリベラル・アーツの枠組みにおいて、英語の歴史を概観しその変化の要因を探ることを基礎に置き、さらにはその変化を起こした背後にある人間の思想・行動様式を考察する力を培うことを目的としている。家入氏は、文学部という枠組みにこだわった英語史教育の実践を示し、近年のコーパスを用いた言語学や、文法化研究によって英語史研究が新たな方法論を迎えたことに触れ、同時に英語史教育は研究者養成までを視野に入れて考える必要性を主張している。石川氏は、現代英語の研究に深い洞察を与えるためにも歴史的・時系列的に言語現象を捉える英語史的視点の応用を提案する。特に現代作家の文体（語彙、文法、連語を中心として）を分析する上で、その作家に固有のものであるか否かを判断する際に応用されるべき、「応用英語史」(Applied Philology) なるものの重要性を説いている。そこに英語史が活用され得る活路があるとする。

2-2. イギリス国文学協会 (2013. 3/9)

時を経て英語史教育の問題を新たに取り上げたところは、イギリス国文学協会 (The English Philological Society of Japan) である。2013年3

³ <http://www.jashel.sakura.ne.jp/resume14.htm> 掲載のシンポジウム発表要旨より引用。

月9日にイギリス国学協会創立20周年を記念して、「英語教育における英語史の効用」と題するシンポジウム⁴が東北大学で開催された。まず協会の会長である渡部昇一先生による基調講演「英語教育における英語史の効用」がなされた。その内容は「実用でない学問としての語学教育は規範文法に基づくことを認識し、そこに見られる文法現象を説明するために通時的な知識が必要となり、それをアカデミックに担うのが英語史の知識である」という見解が提示された。続いて、以下のような2部構成での発表がなされた。

—第1部—

下永裕基（明治大学）「暗号解読からの卒業—howeverについての学生の質問から」

長瀬浩平（桐朋学園大学）「学習者にとっての英語史的視点—ある教室の風景から」

古田直肇（東洋大学）「留学における英文法の効能について」

—第2部—

織田哲司（東京理科大学・現在明治大学）「英語教育における軸の変換—シンタグラマ軸からパラダイム軸へ—」

池田 真（上智大学）「英語教育学と英語史の統合—Applied English Philology の一例」

唐澤一友（駒澤大学・現在立教大学）「新しい英語史とその可能性」

第1部の下永氏は、学生からの「なぜ」の質問（howとeverが結合することにより逆接の意味が生じるのはなぜか）に答える際に、英

⁴ 本シンポジウムの報告は、江藤裕之氏により、「イギリス国学協会創立20周年記念シンポジウム—英語教育における英語史の効用」と題して以下のものに掲載されている。*Asterisk: A Biannual Journal of Historical English Studies*. The English Philological Society of Japan. Vol. XXI, No. 2, 2012: 30-43. 本稿はこの報告を参考させていただいた。

語の史的立場から考察する重要性を認識すること、長瀬氏は英語を学ぶ上での興味を如何に学生に抱かせるかの起点を英語史的観点に求めること、古田氏は規範的な伝統文法の学習の大切さを説き、伝統文法の諸事項を説明するには史的な見方が必要であるという見解をそれぞれ主張した。次に第2部の織田氏は、ソシュールの唱えた言語を構成する2つの軸である「時間に沿った統合関係であるシンタグマ軸」と「時空を超越した連合関係であるパラダイム軸」を捉え、受験英語は多分に前者に沿っているが、大学での英語の勉強の重心は後者に移行すべきで、その基盤となっているものが歴史の所産であり、それを担うのが英語史であると主張する⁵。池田氏は英語史によって得られた英語の特質 (genius) の理解が授業で活かされることにより、生徒や学生の英語習得を効果的に高めることができるのではないかという応用英語学 (Applied English Philology) の立場を提示した。唐澤氏は、近・現代の英語の世界進出を重要視し、これからはさらにこの新しい時代の英語の展開に注目した新しい英語史の導入を提案している。

2-3. 日本中世英語英文学会 (2013. 12/1)

英語史関連の教育は、主に日本中世英語英文学会 (The Japan Society for Medieval English Studies) 所属の会員が担ってきた。本学会でも先のイギリス国学協会に続いて、2013年12月1日に愛知学院大学で行われた日本中世英語英文学会第29回全国大会のシンポジウム⁶において、英語と北欧語との言語接触の問題を新たな知見から考察しながら、それを今後の英語史教育にどのように反映させていくかの議論が行われた。演題は「善きヴァイキングとの出逢い：英語史・中世

⁵ 織田哲司, 「英語教育における軸の変換—シンタグマ軸からパラダイム軸へ—」 *Asterisk: A Biannual Journal of Historical English Studies*. The English Philological Society of Japan. Vol. XXVI, No.2, 2017: 73-80 (p.80).

⁶ 本シンポジウムの内容は、*Studies in Medieval English Language and Literature (SIMEL)*. The Japan Society for Medieval English Studies. No.29, 2014: 164-65 を参照。本稿はこの報告を参考させていただいた。

イングランド史における北歐人の役割」というもので、以下のパネリストが参加している。

松瀬憲司（熊本大学）「英語史の授業において古ノルド語が意味するもの」

小澤 実（立教大学）「歴史学的アプローチによるブリテン諸島のルーン碑文」

伊藤盡（信州大学）「中世ノルウェー語と中世英語の言語接触：ブリテン島北西部におけるノルウェー人から見た言語変化」

横田由美（東京家政大学）「ディスカッサントとしての意見、質問、提案」

ここでは英語史教育に一番関わりがある、松瀬氏の論考のみの言及に止める。氏は「英語とはどのような言語なのか」という問いを、将来英語教師を志す学生に投げかけ、英語に基本語彙を提供した古ノルド語の立ち位置を考察している。言語接触を通して、「古ノルド語は標準・非標準両方の英語変種に存在する」⁷、即ち非標準形は地域変種としても現存していることを指摘し、標準形だけを主に取り扱ってきた英語史教育に一石を投じ、英語を立体的に見ることの重要性を強調している。

2-4. 日本英文学会（2014. 5/25）

続いて2014年5月25日に、北海道大学で開催された日本英文学会（The English Literary Society of Japan）第86回全国大会の第十二部門で、「グローバル時代の英語教育 英語史からの貢献」と題するシンポジウム⁸が開催された。各パネリストと発表内容は次のごとくである。

⁷ SIMEL. 2014, p.165.

⁸ 日本英文学会（編）「第86回大会資料」2014, pp.51-52を参照。

家入葉子（京都大学）「変容する英語—英語史から英語教育へ」

寺澤 盾（東京大学）「グローバルな英語語彙—英語史から語彙教育への提案」

谷 明信（兵庫教育大学）「英語教員養成課程における英語史教育」

池田 真（上智大学）「英語史と英語教育の融合—Applied English Philology の原理と実践」

家入氏は、英語教育の場面ではなかなか反映させにくい 20 世紀以降の現代英語の変化・変容を英語史の枠組みの中で捉え直し、この英語の「動的部分」を英語教育の場でどのように扱っていくかの試論を与えている。寺澤氏は、語彙史の観点から英語の歴史は「借用の歴史」であると明言し、本来語、フランス語、ラテン語・ギリシャ語からなる 3 層構造を形成していることに注目しながら、類語同士の語源的関連などを指摘し、英語自体への興味を英語史が誘うというメリットを提示している。谷氏は、従来文学部の学生を対象に行われてきた、英語史の内容を、教育学部の教員養成としての学生にも適用できるような教育内容に変更する必要性を指摘している。池田氏は、英語史を学ぶことによって得られた英語の特質を理解し、それを授業に活かしながら生徒の英語習得を効果的に進めるといふ、英語教育学と英語史を統合した教授法を提唱している。

2-5. 駒場英語史研究会（2019. 9/22）

さらに、寺澤盾氏を中心に毎年諸大学の大学院生を交えた教員との研究会である駒場英語史研究会が 2019 年 9 月 22 日に東京大学で開かれた。今回のシンポジウムは、「これからの英語史教育を考える—英語史をトリビアに終わらせないために」という演題のもと、3 名の講師が以下のテーマでの発表⁹を行った。

⁹ 3 講師の発表内容の紹介は、当日配布されたハンドアウトに依拠している。

堀田 隆一（慶應義塾大学）「英語史教育における日英対照言語史の視点」

中山 匡美（東京大学）「英語史をさかのぼって見えてくる現代の文法事象」

高山 真梨子（慶應義塾大学修士課程）「英語史が私にあたえてくれたもの」

堀田氏は、今後の英語史教育の方向性を提案し、特に英語を特別視するのではなくその相対化を説き、英語史によって得られる単発な知識を体系的な理解へと高め、その具体的な方法論として日英対照言語史の視点を導入している。この視点は、日英それぞれの個別言語の歴史を比較検討し言語の一般的な通時的傾向を探るというものである。母語である日本語の通時的傾向をも見ることにより、英語との類似点があることを認識し、英語史への興味を身近な現象から引き立てて行こうとする姿勢と言えよう。具体的例として、本来語、フランス語、ラテン語という英語語彙の3層構造を本来語（和語）、漢語、西洋語という日本語語彙の同様な3層構造と比較しながら、言語接触の歴史を紐解いていくというものである。中山氏は、英語の標準形は論理的に構築されたものではないということ、また英語の文法は変わり続けるものであるという認識を改めて英語史の中で再確認している。高山氏は、学部時代に学んだ Baugh & Cable (2013)¹⁰ と細江逸記 (1978)¹¹ の書を紹介しながら、前者の書からは英語語彙の3層構造を、後者の文法書からは副詞的対格の問題、古英語から段々と微衰を醸している叙想法と、should の形式として残る仮想叙想法の問題を、英語史を通して知り得たことを紹介した。

¹⁰ Albert C. Baugh and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 6th ed. London and New York: Routledge, 2013.

¹¹ 細江逸記『英文法汎論』新版、東京：篠崎書林、1978.

以上、これまでの学会・研究会での英語史教育におけるシンポジウムを追ってきたが、初めに英語史研究会（2005）が投げかけた課題は、我が国においての英語史教育の縮小に対する危機感が起因となっているものである。その後の各シンポジウムも、新しい英語史教育への方法論と実践法の提言や現代英語を学ぶ上での英語史の効用を説くもので、「英語史を学んで何の役に立つのか」という誤解を払拭したい意図が強く表れている。海外でも20世紀半ば以降、英語史関係の学会において、英語史教育のワークショップが盛んに開かれているが、これも危機感の現れであるとの指摘¹²がなされている。歴史・比較言語学の原理が英語研究に導入されるのは19世紀においてであり、その成果をもってイギリス、アメリカ、ドイツなどの欧米諸国の大学に英語の歴史的関連科目がカリキュラムに組み込まれるのは、19世紀末である。時を遡って見ると、イギリスでは Benjamin Thorpe (1782-1870) がデンマークの Rasmus Rask (1787-1832) から、John Mitchell Kemble (1807-57) がドイツの Jacob Grimm (1785-1863) から言語の科学的な研究法を学び、それを ‘the New Philology’ として新たな英語の史的研究における礎を作り上げた。その成果を披露しようとして Kemble 自身、英語の小史 (20 ページほどの prospectus)¹³ を書きそれに基づいてケンブリッジ大学で英語史の講義を開いているが、聴講生はほとんど集まらなかった¹⁴ ということ、英語史教育は海外でも最初から順風満帆に始まったのではないことが理解される。

英語史の教授者はそれを教える上で視点をどこに置くか、学習者に対し明確化しておく必要がある。言語上の変化事実を年代順に提示し

¹² 谷明信「わが国での英語史教育の問題と課題：海外と比較して」『兵庫教育大学研究紀要』第27巻，2005：87-94（2.「海外での現状」）。

¹³ J. M. Kemble. *History of the English Language. First, or Anglo-Saxon Period.* Cambridge: printed for J. and J. J. Deighton, Trinity Street, 1834.

¹⁴ このKembleの講義についてのエピソードは、W. W. Skeatの *A Student's Pastime being A Select Series of Articles printed from 'Notes and Queries'*. Oxford: Oxford Clarendon Press, 1896, p.lxi を参照。

説明していくことだけではなく、その変化が起こった背景は何か、言い換えると「なぜ」起こったのかを問いかけることである。変化の要因には、他言語との言語接触のような外部からの影響によるものと同時に、人間の心理的な作用によるものがあることを認知させることが必要であろう。これと並行して、英語史研究会（2005）の石川氏が提案した「応用英語史」（Applied Philology）とイギリス国学協会（2013）の池田氏が提唱した「応用英語学」（Applied English Philology）は、英語史で修得したものを踏まえて次の次元への「応用」を目指したものとして従来の英語史から一步進んだ新しい観点を示していると言える。もう一点記しておきたい。駒場英語史研究会（2019）で、フロアから英語史の授業では、往々にして現代英語期における内容に十分な時間が割かれなくなってしまうことが多いので「英語史を現代から遡って見る」¹⁵ということもあってはいいのではないかという提案があった。中学校・高等学校の日本史の授業でも長い日本史を年代順に追っていくと、近・現代の部分の説明が希薄になってしまいがちである。しかし本来、現代人にとってこの近・現代のことを詳しく知ることこそが、今生きている現状の再認識と将来の状況を見極めて行く上での貴重な指針を与えてくれるという点で、従来の教え方が見直しされつつある。英語史教育においても、この手法は現代の英語との接点を絶えず考慮しながら過去の英語との史的つながりを認識していくという点で、英語史の意義が確認され得るであろう。イギリス国学協会（2013）の唐澤氏の見解の意図もその点にあると言えよう。

¹⁵ Barbara M. H. Strang (*A History of English*. London: Methuen, 1976) が 1970 年から 370 年以前までへ遡っていくというこの記述方法を採用した。また、中尾俊夫の『英語の歴史』（東京：講談社現代新書）も同様である。「現在の英語の例えば文法や発音を出発点とし、時間を過去にさかのぼっていったとき、それらはどのように過去に反映されているかに焦点をあて、述べていくことにした。それは逆年代配列的視点のほうが現代英語の成り立ち、構造をより鮮明に浮彫りにできるからである。」（まえがき，p. 2）

3. 英語史に関する近著

3-1. Buck (2003) と Rissanen (n.d.)

これまで英語史に関する概論書や研究書は数々のものが刊行されてきた。そのタイトルもいろいろである。英語史と称するからには‘history’と題することは当然のことであるが、その他に‘adventure’（冒険）、‘archaeology’（考古学）、‘biography’（来歴）‘development’（発達）、‘evolution’（発展）、‘growth’（成長）、‘making’（成立）、‘origin’（起源）、‘story’（物語）など¹⁶のタイトルを認めることができる。タイトルはさまざまであるが、記述順序は、一般的にはインド・ヨーロッパ祖語の時代から始まって現代英語の時代まで年代順に従って述べるのが伝統的な構成となっている。但し、2つの異なるアプローチがあり、音韻、文法、語彙といった言語上の史的变化を扱った内面史（the internal history）と、言語発達に密接に関連した歴史的・文化的背景に注目した外面史（the external history）とがある。前者の代表的なものは Pyles and Algeo, (1964; 7th ed., 2013) であり、後者のそれは Baugh and Cable (1935; 6th ed., 2013) である。また両者の中間を行くものとしては Millward and Hayes (1988; 3rd ed., 2012) がある。これらの書がテキストとして授業でよく用いられるが、R. A. Buck は次のようなことを理由として、現行の英語史のテキストに対して不満を述べている。

¹⁶ これらの語がタイトルに用いられた書を順に掲げる。下線は現筆者による。Melvyn Bragg, *The Adventure of English: The Biography of a Language* (London, 2003); Martyn Wakelin, *The Archaeology of English* (London, 1988); C.M. Millward and Mary Hayes, *A Biography of the English Language* (1988; 3rd ed., Boston, 2012); Thomas Pyles and John Algeo, *The Origins and Development of the English Language* (1964; 7th ed., Boston, 2013); G.H. McKnight, *Modern English in the Making* (New York, 1928; reprinted as *The Evolution of the English Language*, 1968); Otto Jespersen, *Growth and Structure of the English Language* (1905; 10th ed., Oxford, 1982); Henry Bradley, *The Making of English* (1904; 2nd ed., rev. Bergen Evans and Simeon Potter, New York, 1967); Robert McCrum, William Cran, and Robert MacNeil, *The Story of English* (London, 1986).

It seems ... that our textbooks fail to make connections to current modern language controversies. What our textbooks do not foreground, and what is especially relevant today, is that many current language issues are bound to the history of prescriptivism that the students see unfolding from the 18th century onward.¹⁷

ここで言う ‘current modern language controversies’ とは、今日の Standard American English が直面している ‘standard variety’ と ‘non-standard varieties’ の対立、‘language and gender issues’ や ‘second language issues’ などの事柄である (Buck, p.47)。これらの現代の問題を英語史の枠組みに取り入れ解説がなされたなら、このような言語の問題の所在が明らかとなり、「英語史は役に立たない」といった偏見は取り払われるであろう¹⁸。これに関する Buck の見解は次のようなものである。

Studying the history of the language enables us to see clearly how these issues, at a linguistic level, are not naturally inherent to internal grammatical systems but are rather imposed on them and sustained by particular groups of people. (p.47)

これは英語史が社会言語学的観点を取り込みながら、現代に見られる言語問題をどのように考察し対応していくべきか、学習者に考察させ

¹⁷ R. A. Buck. “Why? and How? — Teaching the History of the English Language in our New Millennium.” *English Today: The International Review of the English Language*, 73, vol.19:1, 2003: 44-49 (p.47).

¹⁸ 英語史の知識が役に立つという利点を、具体的用例を提示しながら示してくれた書と論文に、以下のものがある。堀田隆一『英語史で解きほぐす英語の誤解—納得して英語を学ぶために』東京：中央大学出版部、2011。堀田隆一『英語の「なぜ？」に答える—はじめての英語史』東京：研究社、2016。田辺春美「英語史は役に立つか？—英語教育における英語史の貢献—」成蹊英語英文学研究、第 21 号、2017: pp. 95-112.

るきっかけとなることを提示している。通史的にもものを見る際に、絶えず現代との関わりを忘れないようにすることが重要である。

この現代との接点が肝要であるという視点は、英語の史的研究が活発になされているヘルシンキ大学の Rissanen が歴史言語学における ‘how’ と同時に ‘why’ の発想の重要性を唱えた論¹⁹に通じていくであろう。Rissanen は先ず、「全人類の知識を追求する上での目的は「どのように ‘how’」ということだけでなく、「なぜ ‘why’」を理解することにあると述べる。言語が現在のような構造をなしているのはなぜか、また言語が今見られるような機能を持っているのはなぜかを知る唯一の方法は、その発達と絶えず変化しつつある性質を理解することを通してである」とする。続けて言語変化と発達の研究の重要性をどこに結びつけるのか、そしてその際の中心概念は何かを以下のように論じている。

It is easier to see the importance of the study of change and development in language if it is related to the concept of variation – social, textual and regional, including style and register. Variation is the basis for all language studies which pay any attention to ‘the human factor’, the role of language as a means of communication. It would of course be impossible to try to explain variation without an awareness of diachrony.

即ち、「変種 (variety)・変異 (variation)」が言語研究の基礎となり、これを説明するには「通時態 ‘diachrony’」を意識しない訳にはいかないからだとする。この通時的視点が現代の社会言語学、テキストとその文体、そして地域変種・変異の研究に必要であるとし、「言語変化は遠い過去だけの問題ではなく、現代の言語にも内在する特徴であ

¹⁹ Matti Rissanen (and the Team). “The Importance of Being Historical” Available <http://www.univie.ac.at/Anglistik/hoerprissanen.htm> (n.d.). 谷明信, 2005 (2.5 「Rissanen」) の項も参照。

る」と断言している。ここに英語史教育の存在意義があると思われる。

3-2. Schmitt & Marsden (2006)

英語における「なぜ」という問いは、学問研究の上で重要であることは繰り返すまでもないが、生徒や学生から投げかけられる多様な「なぜ」という質問に対し英語教師はどのように解答すべきか、英語教育の上でも重要な問題である。根拠を明確化した論理的な解答は、英語の体系をより分かり易く理解させ、学生のさらなる学習への動機付けと興味を維持させることに貢献するであろう。この問いかけを主題として、英語の教員を念頭に入れて書かれているのが本書²⁰である。言語学の専門用語を過度に用いるのを避け、文法、語彙、綴り、発音が時を通してどのように展開してきたかを解説し、英語に見られる例外的項目を歴史的原則に基づいて説明することを主眼としている。第1章 (Why English?) では、「他の言語ではなく、なぜ英語を教えるのか」(p. 1) という大きな問題のもとに、「英語は今日世界でどの程度重要なのか」、「なぜ英語は主要な世界語になったのか」、「英語は他の諸言語よりも何らかの点で優れているのか」(p. 1) の問いが発せられている。第2章 (A Brief History of the English Language) では、英語の史的観点からの問いに交じって、「戦争や新しい考え方、そして印刷術は英語にどのような変化を与えたのか」(p. 16) といった、歴史的・社会的出来事との関わり合いの問いがある。第3章 (English Grammar) では、「なぜ英語の文法には多くの不規則形が存在するのか」(p. 42) をもとに、個別の具体的な文法事項の問いが発せられ、「英語の文法はまだ今日でも変化しているのか」(p. 42) との問いが加わっている。第4章 (English Vocabulary) では、「(英語には) なぜこのように多くの語が存在し、それらはどこからやってきたのか」(p. 78)

²⁰ Norbert Schmitt and Richard Marsden, *Why is English Like That? : Historical Answers to Hard ELT Questions* (Michigan: The University of Michigan Press, 2006).

という問いがなされ、第5章 (The Sound of English) では、「なぜ英語の発音は様々であり、またなぜ発音は必ずしも綴り字と一致していないのか」(p. 111) となっている。第6章 (The Spelling of English) は、「英語の筆記体系はどのように発達してきたのか」(p. 150) を問い、第7章 (English around the World) は、「世界の国々の英語はどのように異なっているのか」(p. 171)、そして最後の第8章 (English in the Future) は、「英語は今後どのようになるのか」(p. 207) と将来を見つめた問いがなされている。どれもよく聞かれる質問で、実際に英語史の授業において学生からよく聞かれた質問である。Schmitt & Marsden (2006) は、学生の素朴な疑問に対する解答を平明に伝える方策を提供し、また英語における例外は歴史的基礎に立つと説明できることを認識させてくれる内容となっている。英語史教育の実践的な内容を提供してくれるテキストと見なすことが出来よう。

3-3. Hayes and Burkette (2017)

英語史は年代、地域、学問分野において広範囲に亘る科目であるがゆえに、‘a notoriously challenging course’ (本書裏表紙の解説による) とまで言われてきた。しかしながら上述してきたように、近年において英語史教育を再考する機運が高まり、その問題の所在を洗い出して新たな方向性を見出そうとする試みが高まってきている。本書の Hayes and Burkette (2017) はそのサブタイトルに ‘*Pedagogy in Practice*’ とあるように、まさしくその試みを追求してきた各国の英語史教育家による授業実践の報告論文集である。本書は以下に示すように、Introduction と6つの Parts から成っている。

Introduction, Chapter 1: Mary Hayes & Allison Burkette.

Part One: Reflections on Teaching the History of the English Language

Part Two: The Value of Teaching the History of the English Language:

Rethinking Curricula

Part Three: Research Paradigms and Pedagogical Practices

Part Four: Centuries in a Semester: HEL's Chronological Conventions

Part Five: Including "Englishes" in the History of English

Part Six: Using Media and Performance in the History of English
Classroom

本書では様々な試みがなされているが、共通する課題は6点提示 (Introduction, p.4) されている。その中でも次の3点には注目してよいであろう。

- [H]ow can instructors impress upon students the value of learning HEL without purveying a complacent master narrative of English's innate or cultural superiority?
- How can instructors negotiate the study of the language's conventional "inner history" versus its "outer history," especially when teaching students who have no linguistic training?
- How can instructors account for the current descriptive perspective on language variation?

国際語と認知される英語ではあるが、英語自体が本来保有する利点とその言語が持ち得る文化的な優越性を絶対視せずに英語史を学ぶ価値を学生に伝えること、言語の内面史・外面史をうまく組み合わせ、言語学的素養の無い学生にも教えられるようにすること、言語の変化・変容について現行の記述的観点をもって説明できることである。これらはもちろん英米の学生を対象に設定されたものであるが、日本の学生に対しても十分当てはめることができる。

次に全体から2つだけ章を選んで内容を簡単に紹介しておこう。先ず、Part One: Chapter 5: Sonja L. Lanehart. "How is HEL Relevant to Me?" (pp. 41-55) を取り上げよう。社会言語学者の立場にいる筆者は、

「個人的な目的と興味」によって引き出される “self-regulated learning” (p. 42) ということ念頭に英語史を教え、英語史を学ぶことが自分とどのような関わりを持つのかを学生に模索させる方法を試みている。学生に興味を抱かせるような語のリストを作成し（学生自身がリストを作ることもある）、これを A Word History Paper (p. 46) としてその中から語を選択させ、選んだ語の社会言語学的な歴史を調べさせるという課題を出している。これを完成するために学生は多様なテキスト、手段を用いることが求められている。次に Part Four: Chapter 18: Joan Beal. “Starting from Now: Teaching the Recent History of English” (pp. 223-233) について触れてみよう。筆者は Barbara M. H. Strang (1976) の “Changes within living memory” (Section Two, pp. 23-69) という視点を持って英語史を逆年代順に記述する方法に触発され、「近年の英語の歴史について学ぶことは学生の共感を呼ぶことができる」という確信を持った。その一例として、19世紀の英語が用いられている *Punch* 誌の会話を引合いに出している。上流階級と下流階級の社会グループは発音を固定化させてしまっているので変化を起こす傾向にはないが、下位中流階級の社会グループは社会的上昇を求めて発音を変化させるために “linguistic insecurity” (p. 224) の状態にあるということ、19世紀のイギリスでも20世紀のニューヨークでも起こり得ることを指摘し、この社会言語学プロセスと英語史研究間の接点を見出している (p. 224)。さらに Beal は、“the connection between lexical innovation and external history” (p. 226) を探る上でオンライン *OED* を用いての group task を行わせている。特定の年を指定し、この年に初出する語を探させ何ゆえにその語が初出したのか、“lexical innovation” (p. 226) を引き起こした特別な出来事（戦争、政治、新発見など）が何かあったのかをイギリス史の中から確認させる方法を試みている。これは、内面史と外面史を機能的に関連付けての教授法と言えるであろう。

3-4. Kretzschmar, Jr. (2017, 2018)

3-1. で英語史のテキストにはいろいろなタイトルが付けられているということに触れたが、新しい英語史の書で特徴的なタイトルを施したものを挙げておきたい。William A. Kretzschmar, Jr. による、*The Emergence and Development of English*²¹ である。『研究社新英和辞典』(2002, 第6版)の定義によれば、‘Emergence’とは「《生物・哲学》(進化中予期できない新形質の)創発」という語義が与えられ、‘emergent evolution’という用例が提示されている。そもそもこの語は、「複雑系 (complex system)」の用語で、物理学、遺伝学、生物学、そして経済学などで用いられるが、人文学一般にも適用される。「夥しい数の無秩序な(ことばの)相互作用がどのように秩序化し、明白な根拠もなくそれらの相互作用から規則性が創発するのか」(*The Emergence, Introduction, p.1*)というプロセスを明らかにしようとしたのが、Kretzschmarの本書である。Kretzschmarはこの複雑系のプロセスを、“1) random interaction of large numbers of components, 2) continuing activity in the system, 3) exchange of information with feedback, 4) reinforcement of behaviors, 5) emergence of stable patterns without central control” (*The Emergence, p.24*)と具体的に規定している。「英語の創発」と言った場合は、「英語が一言語としてどのように認知されるようになったかを意味するだけでなく、英語が今日においてどのように独自に成長し変化し続けるかということも意味する」(*The Emergence, p. 24*)とある。この書に先駆けて、KretzschmarはHayes and Burkette (2017)のChapter 11で“Addressing ‘Emergence’ in a HEL Classroom” (pp. 117-139)という論を展開し、「言語」と「創発」との関わりを具体的に考察している。「言語が自ずと進む方向はより多様になることで、それは複雑系が予測する対象である」(p.121)とし、言語と結びつく社会的要因の中に現れる「偶発的要素 (contingency)」(p.122)を複雑系

²¹ Cambridge: Cambridge University Press, 2018.

理論でもって説明することが必要となる。もう少し Kretzschmar の主張を次のいくつかの引用の中で追ってみよう。

The emergence of English, then, does not happen just once, in the way that the traditional HEL course focuses on Standard English, but instead happens all around us all the time. Emergence has happened and keeps happening in an infinite number of groups of people. (“Addressing Emergence”, 2017, p.129)

例えば、英語の各時代区分の中で英語史が捉えている「標準英語 (Standard English)」という枠組みを設定しても、どの言語にも見られるように英語においても ‘emergence’ は何度も何度も起こり続けるゆえ、枠組みを規定・固定化できないということである。話し言葉においても書き言葉においても、どのような地域であっても、またいかなる種類の会話やテキストにおいても起こり続けるということを絶えず認識しておくことが大切となる。従って、Kretzschmar は英語の「実際の歴史」を次のように捉えている。

Thus, while we can still apply the common terms and concepts of contemporary language study and linguistics in order to create an accurate description of periods in HEL, the real story of the language will be about continual emergence and re-emergence of lexical, phonological, and grammatical patterns of English out of the interaction of its speakers and the contingencies of their history. (“Addressing Emergence”, 2017, p.131)

そしてこう結論付けている。

Emergence, then, as a property of the science of complex systems, allows

us to tell a better story about HEL. We do not have to get rid of most traditional elements of the HEL course, but now we can put those elements in an environment that makes more scientific sense. Emergence gives us a way to show how external history, which we have always insisted on telling without really knowing why, really does change the language by describing the contingencies that formed and reformed groups of speakers. Emergence gives us a way to talk about internal history without cutting it off from the speakers. (“Addressing Emergence”, 2017, p.139)

従来の英語史の記述を保持しながら、変化事実を単に述べるだけではなく、変化の要因を探る方法を導入した示唆に富む書となっている。

4. おわりに

英語史教育においても英語史研究においても、いろいろな提言がなされ、また新たな方法論が導入されてきており、従来の枠組みを見直す時期に来ていると思われる。「英語の歴史」を「国際語の歴史」と読み替えることもあり得るだろう。またこれほど現代が多様化したからには、「国際語」という概念を単に‘standard’という基準に組み込むことも難しいであろう。‘Nonstandard varieties of English’が台頭してきている現代では、英語史の記述も‘standard’なものだけに傾倒する訳にはいかない。また、過去から現代へのプロセスを追うことが従来の英語史の伝統的な方法であったが、「現代を基盤とする」、「現代と関連付ける」ことを絶えず念頭に入れ歴史を考える必要がある。そのことは当然、今見られる言語の変種・変異 (variety・variation) がどのようにして生じたのかという疑問を抱かせ、その答えを探る体験の機会を与えることになる。‘How? and Why?’という基本的な疑問により、実践的な英語史教育への貢献を図ることができるであろう。それゆえ英語史が目指すところは、「どのように変化した」から「なぜ

変化した」であり、その変化理由に対する答えのヒントは、Kretzschmar が唱える「創発」による言語内・言語外現象の中に求められるのではないだろうか。